魔法少女の育て方
お兄ちゃんはハイポーション
小説 神楽陽子
挿絵 会田孝信
二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

MAGICAL 1　2と2を掛けたら大混乱？　006
MAGICAL 2　オトナの魅力に迫られて　064
MAGICAL 3　入り口狭すぎ注意報！　110
MAGICAL 4　魔法少女の大逆襲　159
MAGICAL 5　お仕置きはエスカレート！　195

登場人物紹介

Characters

ティナ＝バレンタイン

秀一のもとで魔法の修行をする魔法少女。聖クリスティーヌ女学院の学院長の孫娘で、とても明るく元気な女の子。秀一を「お兄ちゃん」と呼ぶ。

リゼット＝ナハトクロイツ

ティナと共に、秀一に魔法の修行をしてもらっている魔法少女。魔法使いの名門ナハトクロイツ家の令嬢で、いつも無表情な女の子。秀一を「兄くん」と呼ぶ。

ティナ＝S＝バレンタイン

五年後の未来からやってきた、成長したティナ。通称ティリス。お料理が得意だが、少し腹黒い一面も。秀一を「お兄様」と呼ぶ。

リゼット＝L＝ナハトクロイツ

五年後の未来からやってきた、成長したリゼット。通称リズエル。落ち着きのある知性的な女性。秀一を「兄さん」と呼ぶ。

瀬戸秀一（せとしゅういち）

ティナとリゼットのお世話をする錬金術師の少年。聖クリスティーヌ女学院の英語教師でもあり、生徒たちからは「少年センセー」と慕われている。

「はあぁ、あっ？　お兄ちゃん、そんなにしちゃ、っんふあ！」
円の軌道で平らな双乳を圧迫すれば、ささやかな弾力と柔らかさを感触できる。妹の肉体は兄の手によく懐いて、むしろ触って欲しそうに背を反らし、肌を温もらせた。異性の胸はサイズとは無関係に敏感らしく、巨乳とは違って、てのひらで全体を均等に舐めまわせる無抵抗ぶりが、嗜虐の意欲をそそる。
「と・こ・ろ・で。お兄様、もう魔法は切れてるハズなんだけどぉ、いつまでそーやってティナのカラダに触ってるの？」
忘れかけていたティリスの声にぎくりとする。
「へ？　……いっいや、これはちが！」
てのひらに恥汗が染みるまで愛撫に耽っていた少年は、慌てて両手を回収し、一歩あとずさった。が、動揺のあまり踵で躓き、尻餅ついてしまう。
「……はぁ、はあ……お兄ちゃん、も、もうおしまいにしちゃうの……？」
いたいけな肉体は、快楽を中断されたのが不満らしく、もどかしそうに腰を捻った。容姿からは想像もつかない悩ましさが、色香を強烈ににおわせ、誘惑を投げかけてくる。
「おしまいって、そ、それは……」
あわよくば続行したい、という黒い欲求が頭を離れない。
（だめだよボク！　またエッチなことばかり考えて……そ、そうだよ。こんなカタチで女の子と、ええ、エッチだなんて、いけないってば！）

理性の壁を堅固にし、ひたすら道徳を自分に言い聞かせるのだが。
少女の背後取るティリスは、にやついて、しっとりと艶ある太腿をくすぐった。
「ねえティナ、お兄様、こっちも気になるんだって。……どうしよっかあ？」
「こっち？　……やっ、おお、お姉ちゃん⁉」
両手ともお尻の側から、紺色ブルマの三角州に差しかかり、生地に中指を差し込む。姉の腕に膝で跨がる体勢の妹は、表情豊かな小顔にあからさまな羞恥を燃え上がらせて、ハイソックスの脚を閉じられず、びりびりと引き攣らせた。
ブルマの裏側をごそごそと、ティリスの手が動きまわり、ピンク一色のショーツを右の縁から引きずり出す。下着は手品のようにするりと抜け、魔導士の人差し指に従って浮遊し、少年は一度それを見失った。
「あれ？　今のどこに……ンッうぐ⁉」
「バインドって、物体使ったほうが効くのよね。どーお？　お兄様」
いきなり猿ぐつわ。口の両角もろとも頬に、脱ぎたてのショーツが食い込む。妹の体温とにおいをたっぷり蓄えており、呼吸のたび、危険な酔いに落ちそうになる。
年下少女の下着などに涎垂らす恥ずかしさも込み上げた。
「んもっふ、り、ティリふ？　はふして、こ、こえ！」
「うふふ、お兄様ったら喜んじゃって。次はどーしよっかなー？」
ティナもかぶりを振ってばかり、涙を粒にし、頬へと流す。

「お姉ちゃん、や、やだっティナのブルマ！」
ブルマを直穿きの股座に再び、邪な手が伸びて、十分に幅ある股布を剥がす。股間一帯を密封していた紺色ブルマは、左の太腿へと生地を寄せられ、M字開脚の中央に清らかな入り口を曝け出した。
「やん……おっ、お兄ちゃんも……はあ、見ないで……」
声をうわずらせて赤面する乙女の反応が初々しい。反射的に少年は顔を背けても、横目でちらちらと、初めて目の当たりにする異性の部分を観察してしまう。
（女の子のって、あ……あんなふうになってるの？）
穴というよりは、肌が縦にめり込んだかのような、秘密のクレバス。無毛のせいか清潔感に満ちて、男性器の醜さとはまったく違う。完全開脚で大腿筋を水平にしても、肉畝をぴったりと塞ぎあわせた聖域に、妄想をかきたてられた。
「うふふっ、どう？　お兄様。ココに挿れると気持ちいいわよ？　とおっても」
「えっ、い……挿れる、って……？」
暗示めいたティリスの囁きに惑わされ、イメージを具体化させていく。いかにも狭そうな肉穴に、勃起を押し込めれば、どれくらい心地よいのだろうか。少年の唯一逞しい部分がむくりと起き上がり、着衣の中にもかかわらず鎌首をもたげる。
（くうっ？　勝手に膨らんできたよ……ガ、ガマンしないと）
猛烈な意欲に駆られ、解放できるものなら解放したい。呼吸の乱れも口枷のショーツに

遮られて、苦しく、堪えた分の憔悴感に襲われた。
「お兄様、始めましょ？　ティナに教えてあげなくっちゃ。……セックス」
ブルマ少女の両膝を抱え寄せるティリスも、脚を開いて、ティナと股間を段重ねに。奥にずれ込んだミニスカートが巨乳美女の、レースのショーツをちらりと覗かせる。立ち上がった少年は、後ろにさがるつもりが、魅惑の構図に歩み寄っていた。
（な……なんだろ？　これ、しまったマナドレイン……）
いつからか魔法に対する耐性を奪われている。部屋に入った直後からなのか、ティリスの魔術的な罠に引っかかったのは間違いない。マナを奪われることで、理性的な思考力が減退し、野性的な本能を繋ぐ鎖が外れてしまう。
しかも目にも鼻にも刺激が強すぎて、昨日知ったばかりの性的興奮が暴走し、そわそわと劣情を駆りたてられる。
「お兄ちゃん、ティナこんな恥ずかしいのぃや……た、助けてよお……」
「はぁ、あ……うん、待っへて？　今、脱ぐぁら」
頭がぼうっとして、思うことと口走ることに差が生じ始めた。
（だめなのにボク……なんで、ズボン……脱いだりして）
自らパンツまで脱ぎ捨てて、猿ぐつわから滴り落ちる涎で、逸物の乱暴な形をぬめ光らせる。もっとも恥ずかしいところを異性に見せつける快感を、新しく知り、鼓動はペースをはね上げていく。

「お……おにぃ、ちゃん、そ……それって？」
目を丸くするティナの、裸乳の二点、おへそ、それからブルマの隙間へと、怒張の向きを調整し、茎胴を片手に握り締める。直径が四センチ近い肉棒は自分の手にも太い。包皮は雁太で突っ張り、剥けない状態だ。
「らっだいじょぅふだよ。ボクも気持ひいいのっれ、はいしょは怖はったけど」
鬼畜の言動に自覚はあっても、口が勝手に動く。もしかしたらまたティリスの魔法なのかもしれない、しかし、妹を暴行したがる獣の部分が、自分の股間には生えていて。
「ま、待って……お兄ちゃん？　今日のお兄ちゃん……なんだか変だよ？」
あどけない妹のショーツに舌をのたくらせ、穢れを知らない乙女の聖域に、卑猥な矛先を近づけていく。少年は瞬きも忘れて、接触の瞬間を凝視し、先端の感覚神経を研ぎ澄ませた。一度は裏筋で乗りあがった秘裂に、添えなおす。
「さあ、どうぞお兄様？　これでお兄様はあたしのモノに――」
「いっ挿れふよ、ティナ？　く、くぅううッ！」
第三者の囁きなど聞き流し、口枷のショーツを噛み締める。肉杭は二度目で、清らかな入場口に割り込むことに成功し、少年の上半身は前のめりになって体重を掛けた。
ずぶっ！　ずぶ……ずぶ、ずぶ、ずぶずぶ！
「いやぁああッ⁉　おおっ、お兄ちゃん、はあっ！　お兄ちゃんのが！」
幼い作りの秘裂をこじ開け、肉体の一部を侵入させる。敏感な性感帯を押し込むこちら

も恥声を張りあげずにいられない。
「はあぁあ！　こっこれ、ふ……すろひ！　せっ、せまふぎて！」
俄に汗だくになった肌を、少しでも冷やしたくて、シャツも捨て丸裸に。それくらい躍起になる自分を信じられないし、もう止められない。
（入ってるボクの、ははっ、入っちゃってる！）
精神の止め具をひん曲げて、熱硬くなり苦悶する勃起を、粘膜のトンネルにずぶずぶと埋めていく。擦過させるだけでも、甘痺が先端に群がって、危険な快楽を増大した。
穴掘られるティナが、ポニーテールを振りまわし、舌まで出して悩乱する。
「ははっ入っへる、お兄ちゃんのがっ、はぁ、はっ入っれるよお！」
体操服の捲れた胸を精一杯に揺らし、細腰で暴れまわる。それを両手で捕まえ、少年は左右に分かれて逆行する力のベクトルに抗い、狭間に剛直をくぐらせた。
脈拍の回数が結合部だけ多くなり、妹と繋がるのを実感する。
（す……すごい、ティナのもボクのも、脈！　脈打ってて！）
狭さを押し拡げる際に、包皮が脱げ、亀頭冠の神経も剥き出しになった。イメージにはなかった、ぬるぬるとした粘膜質の柔襞が、群れを成し、雁首に絡みついてくる。
「お兄ちゃんっ、おお、お腹！　お腹膨れひゃう！　とっ、とめて……！」
「ボ、ボクもちょっろ……ッはあ！　はぁ、あふ、す、すごすひる！」
たまらず尻込み。ミリ単位で閃く快感が強すぎて、進むのを恐れてしまう。まだ半分も

挿入していないのに、ペニスは完全勃起を果たし、蜜を先走らせた。茎根で電圧が生じ、痺れを頭頂に走らせる。今にも達してしまいそうな予感。
「ら……らめはよ、もっもうボク、せーへきでっ、出ちゃいそお！」
ところが先にティリスが、接合部に右手を伸ばし、人差し指から魔力を放った。
「まだイっちゃダメよ？　お兄様。少ぉし遅らせてあげるから。心ゆくまで過去のあたしを味わってね。……はい、スロウ」
すでに果てたつもりだったのに、汁が飛び出さない。時空魔法のスロウで、射精までの耐久時間を延長されたらしい。
「だっ、はからってティリス、こんなの……あぅく！　んくはぁあッ！」
だが射精そのものが後まわしになっただけで、快感の強さに変化はない。むしろ亀頭は感度を増して、ひりつき、熱く帯電する。
「おぉお、お兄ちゃんのが、まっまた太く！　ふろくなっへるぅ！」
股間に肉の杭打たれる少女がのけぞり、ティリスの巨乳を枕にした。可憐な唇に零れた涎を、噛み千切り、片目を伏せて。体操着の裾から差し出された初心な裸体も、においの芳しい汗まみれ。妹の切ない表情も、抗う仕草も、すべてが今はいとおしい。
「やぁあっ、ひ！　……拡がる、拡がっ、て……ひぎぃいいい！」
「ティナ？　はあっだいろーぶ、だから、もっもう少し！」
苦しめているのかもしれない後ろめたさを背負いつつ、今更引き返せない挿入をずんと

深くし、腫れた頭部で何かを突き破ってしまう。
ずぶずぶ、ぶちっ！　ずぶん！　ずぶずぶずぶずぶ！
「かっはぁぁあああッ⁉」
涙の止まらない瞳が強張り、数秒の間、ティナは人形のように反応がなくなった。
「っはあ、はあ……はぁ、ティ、ティナ？　入ったよ、ボクの……」
狭苦しい肉路にペニスを最後まで埋めた少年も、病的に息を切らし、重たい疲労を肩に乗せる。勃起だけ根元から高温多湿の粘膜に閉じ込められる、不思議な感覚だ。
幼い牝穴は一帯が盛り上がり、男性の根元にキスをしていた。最深部に亀頭を送り込む肉柱は、吸いつくような襞に全体を密封されて、過熱し、血液の循環を急がせる。相手のおへそ近くでは頭頂がエラを張り出し、妹の生殖器官を開拓した。
（ほんとにしちゃった……や、やっちゃったんだ……ボク）
快楽のあまり挿入を急いだのは自分ではなかったか、遅すぎる罪悪感がいっそう肉根を鮮明に感覚させる。穢れた逸物が、妹の純潔に潜り込んで、今なお脈打つ光景を、網膜に焼きつかせる。熱く濡れた粘膜は肉棒にぴったりと張りついていた。
「んふぁあ？　お、お兄ちゃん、ティナ……おっ、お腹膨らんじゃうよお」
ようやく我に返ったティナが、痛々しく拡がる接合部から甘蜜を湧き立たせ、ブルマに染みを這い上がらせる。ティリスに抱えられて蒸れた太腿を、引き攣らせ、ニーソックスだけの爪先で宙に小円を描く。

「カラダが、び、びくびくってして、おおっ、お兄ちゃんのもびくびくして！」
秀一が押し掴む腰もべとべとだ。わずかに丸みのついた胸が、淫靡に照り返り、普段の元気少女には見られない、蠱惑的なよがり姿を演出する。
（いけない、けど……な、なんだか今のティナ、すっごく可愛いかも……）
こうして肉体を重ねて、初めてティナの愛らしさを知ることができたような。単純に感触だけではない肉交の悦びに、不思議と胸がときめく。
赤面するティリスが妹の肩越しに、猥褻の結合部を覗き込んだ。
「や、やだもう、お兄様ったら……ティナも変な声出すんだもの。あたしまで変な気分になっちゃうわ……んはあ、ちょっとだけ……」
肉杭が深く挿さって拘束の必要がない少女から、両手とも離し、自分の三角州へと指を集めて。アダルティックなショーツに中指を一番に差し込み、まさぐり始める。
「お兄様ぁ、見て？　じーっとしてないで、あん、あたしたちのオマ〇コ、はあっはやく性欲の捌け口にして！　ずぼずぼって！」
開脚オナニー中のブロンド美女の上に、ポニーテールの愛玩動物を乗せて、どちらも贅沢に独り占め。節操のない少年チンポが膨満する。
（えっエッチすぎるよ、こんなの！）
暴行の意欲に拍車をかけられ、埋没する亀頭が急にむず痒くなった。わらわらと蟻でも群がるような掻痒感に煩悶し、もう擦らずにいられない。

『MAGICAL3　入り口狭すぎ注意報！』より　その２

振り返った時には遅く、浴室ドアの外側が氷漬けに。魔法の属性からしてリズエルの仕業に間違いない。闇の魔導士はバスルームの天井で、重力を逆に身を屈めており、目の前にふわりと降りてきた。

「恐縮です。兄さんに制服の物干しなんてさせてしまって」

「いぃや、そ、それより！　リズエルまでどうしたの？」

浴室四隅の一角に後退するしかない少年とは対照的に、リズエルは漆黒のユニフォームが濡れることを気にもせず、湯船に両腕を沈め、銀髪少女を引っ張り起こす。

「姉さん、待って。……自分で上がれる」

プールの授業でもツインテールを解かないリゼットは、前のめりになって二本のおさげを滴らせ、よいしょ、と少女にとってはやや深い浴槽を跨いだ。

まめに爪を削ってある足指が、床のタイルで踏ん張る前に滑りそうに。

「ひゃあ？」

それを長身のリズエルがしゃがんで、優しく受け止めた。

「……っと。危なかった。ありがと」

「気をつけなさい。ほら、ゆっくり足を揃えて」

直立姿勢のリゼットと同じ目線になるまで蹲った秀一は、蒼白になり、経緯をリズエルではなく、嘘を知らない教え子のほうに問いただす。

「リゼット、あの……授業中じゃないの？　それに、その格好……」

「これ？　えと。姉さんがデモンズゲート……教えてくれたから、代わりにひとつ、ゆーこと聞きなさいって」
無垢な少女はスクール水着の肩紐に親指掛けて、拙い平仮名のゼッケンを、平たい胸に張りつけた。錬金術師の少年は頭を痛く悩ませる。
（ティリスといい、リズエルといい……！）
どちらも発想が似たり寄ったりだ。リズエルもここで、過去の自分と秀一に肉体関係を結ばせる、既成事実狙いだろう。
「兄さん。私たちも始めましょうか。……ですけど、ティリスに先を越されたのは不愉快ですね。それに、ど……どうせなら兄さんも、気持ちいいほうがいいでしょう？」
赤面する銀髪美女が、左手人差し指で描いた魔法陣を、ぴんっと弾く。正体不明の魔法はタオルをすり抜け、男の子の部分に命中した。
「うっうわわ？　これなんなの？」
「時空魔法ヘイストです。これで……その、せっ、精液の量を増やせますから」
精子の生産が速くなったらしい。それも実感できるほどで、股座にぶらさがる宝玉袋がずしっと重たくなり、俄に息も乱れ始める。
「せーえきの、はあ、量って？　くっ、リ……リズエル、こっこれとめて！」
強迫的な獣欲に駆られ、水着姿の少女が好物に見えてしまう。ついさっき同じくらいの背の女の子をご馳走になったばかりのせいか、発情が著しく早くて、節操のない肉体は苦

悶に汗かいた。勃起は熱い血潮で硬くなり。
(だっ、だめだめ！　……リゼットとエッチ、しちゃおうなんて……)
桃色の妄想が脳裏に浮かぶのを、振り払うまでの時間が、だんだん長く、難しくなっていく。そのような悪循環に陥った少年に、リズエルに何かを吹き込まれたらしいリゼットが、背中向けて、小振りなお尻を差し出してくる。
濡れそぼったスクール水着の潤沢が、うら若い妹の曲線をなめらかに這いまわった。
「兄くん。えと……なんだったっけ」
お尻をこの角度から眺めるのは初めてだ、渓谷をつい視線でなぞってしまう。濃紺の薄生地がぴったりと、双子の丸みを包装し、白い太腿の付け根に食い込む。
「あ。思い出した、兄くん。……せっくす？　とかゆーの、して」
「え？　……ちょっ、リゼット⁉　意味わかってるの？」
「知らないけど。わたしも姉さんみたいに、大悪魔。……召喚できるよーになって、購買のパン、ティナの分も買ってあげたいし」
マイペースな少女本人はまったくの無知らしい。
(リゼットまで？　だ、だめだよそれは絶対、なんとかして……逃げないと)
リズエルも後背位のポーズで、タイツの湿った脚を広げ、ハイヒールで高さを保ち、小柄な妹のお尻に乗っかる。そして邪魔になるマントを外し、紫色の、レースで縁取られたショーツをタイトミニから見せびらかす。

「な……なんでしたら、兄さん？　……こ、こちらでもいかがです？」
悩殺の構図に釘付け。さっきは正面からだった姉妹の段重ねを、今回は後ろから。そのうえ、魔力を奪われたばかりで、耐性が回復していないというのに、リズエルにマインドブラストを打ち込まれてしまう。
「ガマンはカラダに毒ですよ？　さあどうぞ、お……お召し上がりになって？」
「――――ッ！」
本来は標的を失神させる魔法だ。またも理性の力が弱まり、本能が暴走し始める。肉柱は急速に膨張して、ひとりでにタオルを剥ぎ捨て、重たい亀頭は、へそに迫る高さで真っ赤に腫れあがった。鼓動の震源を逸物に奪われ、脈拍を制御できない。
（だ、だめだボク……今の、直撃……）
ふらふらと魅惑の乱交に誘われ、せっかちな肉砲からカウパー腺液を先走らせる。拒絶の理由を思い出そうとしても、思考は、黒い欲求に遮断されてしまう。
（もっ……もうガマンなんてしてらんないよ、ボク！）
湯気がもうもうと立ち込めるバスルームの中、少年は、紺色の水着を桃の形に薄く引き伸ばす、ミニサイズのお尻を両手で視界に取り出した。尻頬に触れるてのひらが自然に徘徊し、伸縮性ある薄生地の、しっとりとした濡れ具合を確かめる。
「リゼットの、はあ、オシリ……？」
本当は妹を、こうやって辱めたかったのかもしれない。愛撫には少なからず意志と、興

味があって、触るほど止められなくなった。
「ひあ？　……あぁ、兄くん？」
背丈に合わせた特注のスクール水着越しに、左右対称の曲線がてのひらに、ありありと浮かび上がってくる。大きな林檎のごとくラインに張りがあるようで、手荒に圧迫すれば柔らかな弾力が跳ね返ってくる、異性ならではの触り心地だ。
「リゼットのオシリ、はあ、ぷるぷるしてるよ？　か……感じてるのかな」
「兄くん、わっ、わたし？　んふ……あっ、あぁあ」
妹の淡々としていた声の調子が乱れて、トーンをあげる。姉の股間にお尻を踏み台にされるリゼットは、反らした胸でスクール水着を伸びきらせ、湯濡れの太腿を震わせた。華奢な両手で湯船に掴まり、かろうじて、膝の浮いた姿勢を支えている。
上に跨がるリズエルは、タイトミニに両腕を手首まで突っ込んで、湯気で湿ったショーツのサイドを引っ張り、量感あるお尻に薄布を吸いつかせた。
「ご、五年後にはこのサイズなんですよ？　兄さん。ど……どうです？」
促され、一度は目線を高くする。
（もっ、もっとボク、はあ、オシリ触ってなくちゃ……）
年上美女のスカートの中にも興味はあった、けれども、妹の初心な肉体から右手も左手も剥がせない。性的興奮が行きすぎて頭の中は沸騰中だ。少々躍起になって、あるはずの入り口を、濃紺に濡れ染まった薄生地の上から探す。

「んあっ！　あっあぁ、兄くん……どうして、そ、そんなとこ？」
「だ、大丈夫だよ？　リゼット。んあ、気持ちよくなるから」
尻頬を撫でさすっていた片手を裏返し、鉤に曲げた中指で、股間前方をまさぐる。数回前後するうち、秘密のクレバスに指先が差しかかり、目を凝らせば、スクール水着の股布に幼い膨らみとめり込みが見つかった。
「あっあぁ？　やっ……兄くん、そっ、そこ……くすぐったぃの……！」
薄生地もろとも中指を浅く押し込むと、しなやかな脚が八の字に痺れを走らせる。左肩越しに振り向くリゼットは、羞恥に赤くなり、珍しく声をうわずらせた。
（これって、い、いいかも……？）
何も知らない年下の妹に限りなく性的な悪戯をしてみたい、黒い欲求が、猛烈に込み上げ、弄らずにいられない。ぷにぷにとした肉畝を按摩しつつ、割れ目を、引き返す中指で尻谷に向かってなぞっていく。
「やぁあ、あんっ兄、くん？　いつもと、はぁ……なんか違う？」
「そんなことないよ？　はあ、じ、じゃあ次は」
そして興味津々に目をぎらつかせ、一枚の股布を右に寄せてしまう。つるんと無毛の恥丘が食み出し、ティナとよく似た、縦筋に過ぎない前の穴が露になった。
（これがリゼットの、お……オマ〇コ！）
一度中を見てみたく、お尻に顔を埋めるように近づいて、慎重に人差し指と中指を挿し

込む。指の動きにシンクロして悶えるリゼットの、暴れそうなお尻を、もう片方の手で押さえ、乙女の秘裂をこじ開けていく。
「あぁっ兄くん⁉　なんかっ、ひ、拡がる……わっわたしの！」
小円の軌道で穿り返し、ようやく肉畝の合わせ目が綻んだ。舌に酷似した花びらが左右にまろび出て、淫欲の通路を開門する。覗き込む少年は知らず知らず感嘆していた。
「うわあ……ここが女の子の中、なんだ？　すごい……エッチな色してて」
想像していたものより複雑な作りで、肉唇は大小二層だ。小さいほうは輪の形で、本格的な粘膜地帯はさらに奥で待ち構えている。肌にはない粘性のピンク色が扇情的で、無限に意欲をそそられた。
二枚の肉唇が重なって見えにくい箇所には、肉豆が一粒埋め込まれており、赤々と充血中だ。少し指が掠めただけで、浜に打ち上げられた魚のごとく腰で跳ねる、敏感少女。
「んふぁはあッ？」
淫らな妄想をかきたてられ、反りあがった肉砲を疼かせる。
（ここに挿れたりしたら、やっぱりまた、す、すっごく気持ちいいのかも……）
先刻は、これほどにも狭苦しそうな穴にペニスを埋め、擦りまくっていたらしい。最後には尿とは別の汁を注ぎ込んで。気持ちよくって。
「ち、ちょっと兄さん？　リゼットばかり見てないで、わ……私のも」
すらりと脚伸ばすリズエルがショーツを半脱ぎにし、発育豊かなお尻を上下にも二等分

する。牝一匹だけでも淫靡な香りが濃くなり、股間と本能を直撃。
（いっ、いい……いぃニオイ）
呼吸三回のうちに酩酊し、頭がくらくらする。発作に苦しむ少年は、踵を浮かせて不安定に爪先立ち、無性に痒くてたまらない肉棒を引っ掴んだ。大きく息を吸い込んで、肺に酸素を溜め、矛先を妹の、すぐ閉じてしまった秘裂にあてがう。
「もっ、もうボク、ガマンできないよ……ボクっ、あああ、リリ、リゼット！」
「兄くん？　……ひあっ、な、なんか動くの？」
ところが、挿入には太すぎる怒張が、肉花弁を逸れ、スクール水着の股布に潜り込んでしまう。薄生地に独特のざらつきが、赤腫れた亀頭を痛く摩擦し、表面が焦げるくらいにひりついた。刺激の強さに脊髄反射で腰戻し、すぐに引き抜く。
「ッあ？　あっ、あぁだっ、だめだ！　もっもう出る？　もう……！」
しかし熱い液が、と思ったものの出てこない。スロウの効果はまだ継続中らしく、亀頭の感度を高まるところまで高め、快楽を続行させてくれた。
「……？　はあ、い、いいや、っく……それより、つ、次はちゃんと挿れるからね」
今朝に経験した正常位とは角度がまったく異なるようだ。イメージ任せにせず、結合に注目し、肉唇の隙間に自分の先端を割り込ませていく。
ずちゅっ！　ぬちゅ、ぬちゅぬちゅぬちゅ！
「ひあぁあふぅ⁉　あっ兄……くんッ、ああっ！　あくぅううう！」

「リゼット！　はあっリゼットのも、しっ、締めつけてくる！」
スクール水着のお尻に両手でしがみついて、拡張感の出所を念頭に、肉棒の傾きを調整する。最初の抵抗こそ強かったが、小陰唇の輪をくぐりさえすれば、軌道に確信を持って進むことができた。
「やあぁあっ、あっ兄くん！　兄くん、なっ、なんか入っれきてるの⁉」
「入ってるんだよ、はあ、リゼット！　ぼぼ、ボクのが！」
説明しきれずに涎を噛んで、柔襞の深海を泳ぐ。狭さだけでなく、うねりも圧力を増幅し、小さな身体には信じられない力で肉棒を苛烈に締めつけた。
（やっやっぱり、ここ、す、すごすぎて！）
強烈な快感が一度に絡みつく。先頭の鈴口から、丸い亀頭、裏筋、雁首、そして幹胴とあますところなく、煮えた粘膜に抱擁される。間違いなく病みつきになる肉悦に、少年は耽溺し、下品に舌をのたくらせた。
「あぁぁ、あっ！　リれッット……り、んふぁあ！」
次第に加減がなくなり、結合音に耳を澄ませる。雁太はぬかるんだ肉洞を潜行し、途中で何かを突き破った。
ぶちぶちっ！　ぐちゅっ！　ぐちゃぐちゅぐちゅぐちゅ！
「かっはぁあああらッ？」
左向くリゼットが瞼を押し上げ、瞳を強張らせる。痛々しく拡げられた秘裂からは鮮血

も滲む。しかし少年はその意味を考えていられず、幹太の残りを捻り込んで、肺に蓄えた空気をすべて吐き出した。締めつけが根元まで、蛇のごとく食らいついてくる、淫猥な実感と心地よさに涎がまるで止まらない。

「くぅううう！　く……はあっ！　はぁ、はあ……んはあっ！」

スクール水着の薄生地を引っ張り、少女のお尻を自分の下腹部に固定する。

少年と妹が繋がるのを、リズエルはずっと羨ましそうに、背中越しに見詰めていた。

「に、兄さんたら、やだ……そんな、気持ちよさそうな顔で……ほ、ほんとにエッチの時だけは、ケダモノなんですから」

「はぁ、はあ……ボクが、ケ、ケダモノ？」

ショーツを太腿の付け根までずらし、お尻の側から股座に両手を伸ばす白銀美女が、頬染めて恥じらう。リゼットとまったく同じ形の肉穴には、数ある指を詰め込まれ、一帯を盛り上がらせていた。

「兄さんたら、あっあぁあ……！　はぁ、毎晩なんですよ？　ティリスと一緒にお風呂に入って、はあ、こんな声出してたり」

長身の彼女は彼女で、伸びやかに爪先立たせて、手首を返し、壺口をほぐす。相当手馴れているのか、細い指の出入りが激しい。

（女の子って、ああやって……ユビをオチンチンみたいにして！）

ペニスがない代わりに指を埋め込む、女性ならではのオナニースタイルに、興奮を増長

され、こちらの勃起は硬くなる。
「そっ……それが私と、いぇリゼットと……って思うと、ぁん、嬉しくて！」
ごぽごぽと白泡を湧き立たせては、ガーターベルトのずれた太腿を打ち震わせる姿が狂おしい。眉を緩めて、唇もしどけなく、少年の裸に見惚れる瞳は悦びに満ちていた。
「兄さんも！　もっと、んはあっ、好きに感じてください！」
「う、うん、リズエル。ボク……くうっボクも！」
無理に後ろ向くため、肉感的なプロポーションが強調され、膣内挿入中の男の子を過剰に昂らせる。彼女の指技を真似て、肉太をゆっくりスライドさせれば、途端に摩擦が電流となり、甘い痺れが頭頂に絡みついた。
「はっ、はぁあ！　リゼット！　リゼットも、っんあ、ほらっ感じて！」
「ひはあぁあ⁉　あっ、ああぁ兄くん、うっ、動いへ、動いれる！」
破瓜の直後から動きのなかった妹が、舌に大量の涎を浮かせ、涙流して瞬く。スクール水着に腰を密封された細身が、湯気の中でも明らかに火照り、ぶつかる太腿はべっとりと汗ばんでいる。股裂き同然のサイズで肉洞を穿られ、ツインテールは大きな波に。
「ああんっ、あふはぁ！　あいっ兄くん！　こすれ、こすっちゃ、やっ、んはぁあ！」
痛がるにしては悩ましくウエストをくねらせ、湯に濡れたおさげも波打つくらい、小首を振りまわす。とめどない快感に少年が脚を引き攣らせ、直立に近い姿勢になると、妹の素足はタイル面に届かなくなった。

ぬぷっ！　ぬちゅぐちゅぐちゅ！　ぐちゅっ、ぐちゅぬちゅぐちゃ！
「あひいっぐ、んあぁ！　兄くんっ、は、激ひ……おっ、おおっおくぅう！」
両手は湯船を離さず、じたばたと「後ろ足」を暴れさせる小動物のお尻を抱え寄せ、肉棒に振動を送り込む。正常位よりも頻繁に、先端が奥に激突するような。痛みになる寸前の刺激が、雁太に突き刺さり、少年も熱い喘ぎを吐き出す。
「リゼット！　はあ！　リゼットのも気持ちいいよ！　っんはあ！」
伸縮性あるスクール水着の生地は、掴むにもちょうどよく、膣圧に追い出されそうな肉杭を押し戻すことが容易（たやす）い。二回、三回のストロークでピストンの軌道を開拓し、次第にリズミカルになっていく。
（やめらんない……こっ、こんなのやめらんない！）
風呂よりも高温の粘膜襞が、同等の水分を含んで、じゅるじゅると蠢く。男根のやじり型も膣のうねりに対して、効率的すぎて、一回に襲いかかってくる快感が多すぎる。玉袋をぶらさげる股関節は痺れっ放しだ。
半円状に張ったエラを直進の妨げにして、捻り、何度も突っ込む。
「ああっ兄くん！　びりびりって、あぁん！　あっアソコ、びりびりしへる！」
妹のお尻が突進してきては、下腹部に擦り寄り、甘えてきた。そんな愛らしい仕草を両手に独占し、お兄ちゃんも先端の焦燥感に駆られて、息を荒げる。
「っはあ、リゼットも、くう！　イっちゃうの？　はあっリゼットも！」

「あん！　私もよ、兄さん！　イク！　こんなにいいの、はっあぁ初めて！」
少年少女の淫猥な繋ぎ目に、熟れた美女のエキスが零れてくる。リズエルもリゼットの上で、お尻を突き上げ、両手オナニーに熱中していた。
ぐちゅぐちゅ！　ぐちゃっぐちゅぐちゃ、ぐちゃぐちゅぐちゃ！
男根挿入と区別のつかない粘音を鳴らし、指を次々と交換する。美女のひとり遊びを正面に少年は、肉柱の血管を脈打たせ、亀頭をギンギンに充血させた。悦痺れが脊髄に直結し、全身の毛穴を燃え上がらせる。
「ああぁっボク！　ボクもう、ほんとに、っはあ！　ほんとにイク！」
汗噴いて息を切らし、過熱するペニスを一心不乱に打ち込む。妹のヴァギナも汁をよく滴らせて、窄まり、先端から根元まで均等に食い締めてくれる。
「あぁ兄くん、兄ふぅん！　わたっ、わたひもぉ、もお、あのっ、ひはぁあ！」
「イクんだよっ、リゼットも！　はあっはあはあ！　はあはあはあはあ！」
膣の緊縮が始まるのを感じた。蜜を大量に先走らせるお兄ちゃんも、スクール水着の両サイドを引っ張り寄せて、一番奥まで怒張を届かせ、Pスポットを小刻みに連打する。
ぱんっ！　ぱんっぱんっぱんっ！　ぱんっぱんっぱんっぱん！
兄と姉の隙間でのけぞる小柄な妹が、ツインテールを左右に振り上げた。
甲高くいなないて舌垂らす、射精道具の少女リゼット。
「きてるっ！　ききっきてるの兄くん、あにぃくぅうううぅぅぅうううううッ！」

『MAGICAL5　お仕置きはエスカレート！』より

「お兄ちゃん、は、はやく……ひとのいないところ」
「お、おうちに着くまでガマンして？」
しかし紙一重の危機感が、性的倒錯に拍車をかけ、妹をいっそう困らせたくも。少年はスローペースで歩調を合わせ、後ろに少し離れてティリスたちがついてきているのを確認してから、あえて道を変えた。
ルートに勘付いたらしいリゼットが踵を引きずり、躊躇する。
「待って、はあ……兄くん、そっちは、あの、繁華街……」
「でも距離でいったら、こ、こっちが近いでしょ？」
アナルにロッドが「生えた」妹たちを連れ、人通りの多い道を選ぶ。ティナもリゼットも四肢に緊張を漲らせ、次第に騒々しくなっていく空気に、少年も身震いした。
（今ボク、すごいコトしてるよ。女の子に、や、やらしいコト！）
人込みでこそ容姿の目立つ魔法少女が、足をもつれさせ、前のめりに。倒れる前に受け止めた身体は驚くほど軽い。
「きゃっ！　……んふぁ、お兄ちゃん、あ、ありがと」
「見えちゃってるよ？　気をつけないと」
意地悪なお兄ちゃんは、ミニスカートから食み出す金属製の尻尾をくいっと捻り、無垢な妹を赤面させる。
「やだ⁉　だ、だめだよ……はあ、いきなり、さ、触ったりしちゃ」

「リゼットも注意してね。スカートがティナより短いんだから」
黒衣の少女にはマントがある、とはいえ、タイトミニのスカートにロッドがどうしても入りきらない。太腿を前後させるうちに裾が撚れ、ショーツの三角を裏返した、どろどろの股間が危なっかしく見え隠れ。
「……兄くん、はぁ、今日はとても……い、いぢわる？」
ショーツをまともに穿いていないティナも、スカートの前を見下ろしたり、肩越しに尻尾の長さを何回も確認したり。
すれ違う通行人は、少年が連れ歩く少女の派手な衣装姿に目を白黒させ、首傾げて過ぎ去っていく。人の数が増えるにつれ、不安そうにティナとリゼットは、お兄ちゃんの腕に両手でしがみついて、汗いっぱいに華奢な身体を火照らせた。
「だめ……お兄ちゃん、ティナね、なんか……おぉ、おかしくなっちゃいそう」
「兄くん、わたし……はあっ、わたしのカラダ、あ……熱くなっへきてる？」
少女たちの胸の鼓動が響いてくる。どちらも息遣いが異常に荒い。人々の何気ない振り向きにも、びくっと四肢を竦ませ、ポニーテールの妹は切に涙を溜めた。
「お兄ちゃん、も、もぉ許して？　ティナの、おぉオシリ」
すっかり弱気なティナの細腰に片手をまわし、もう一方のリゼットも抱き寄せる。
「ひゃっ？　あ、兄くん……！　んはあっ、こ、これ……きちくげど」
ツインテールの妹はしきりに人を数え、前進どころか後退して。後ろに金属製の尻尾を

突き出し、自らタイトミニを捲ってしまう。
（可愛いかも……ティナもリゼットも、ボクに、エッチさせられてるのに）
これだけ辱められても従順な妹たちに、もう獣欲を抑えてなどいられない。今も少年の腕の中で、悩ましそうに腰くねらせ、身を擦り寄せてくる愛らしさ。
ふたりとも股を追加で濡らしているに違いない、紅潮気味のアヘ顔から、危険な吐息をにおわせ、快楽と恥辱どっちつかずの身震いをしていた。
「いっ急ごうか？　はあ、ボクに掴まってて」
早くスカートの中を再確認したくて、今度こそ急ぐ。二足歩行どころか引きずられる姿勢の魔法少女たちは、もう人目を憚ってもいられず、お尻を振りまくった。
「あっあぁん！　おぉ、お兄ちゃん、そんな！　いっいきなり！」
「めめっ捲れる！　捲れひゃうっオシリ、おひりぃいいいッ！」
悩乱する妹を支え、裏路地に入ってアトリエを目指す。そこで先まわりしていたらしいティリスたちと合流した。
「お兄様ったら、も、もう……こーいうのばっかりホント好きなんだから」
「私たちがレビテートでお部屋までご案内します。後は、その……」
レビテートの魔法で浮遊し、窓から秀一の私室に直行する。靴を履いたまま全員が入室し、尻穴少女はベッドを見つけるや、力尽きて突っ伏した。
「ッはあ！　……はぁ、はあ、恥ずかしかったよお」

「兄くんの、はあ、へんたい……で、でも……あっく、ぁはあ」
痙攣して、うつ伏せでも大胆に脚を広げ、幼い股座にずぶ濡れのショーツを吸いつかせる。ティナは涎を舐め取った後も、ラズベリー色の舌を回収できずに、細めた瞳を、羞恥とも快楽とも言いきれない涙で満たす。
リゼットも唇をぬめ光らせて、犬のような呼吸で舌を出し入れし、長睫毛を半分まで伏せた。いつぞや前の穴をお兄ちゃんの肉棒で荒らされた時と、まるで同じアクメ顔だ。
「ひやぁああぁッ⁉　おおっオシリ！　お兄ちゃん、んふあっ、オシリの！」
「兄くんっ、ン……ぁはあ！　オシリの中の、う……うっ、動いへる！」
盛り上がった肛門がひくついて、ロッドを数センチひり出しては、また呑み込む。腰で暴れた回数分、尻尾で宙に弧を描き、接合部に白泡を滲ませる。ミニスカートをロッドに捲り取られ、変わり果てた股間一帯は、上からでも眺めることができた。
「だ……ダメだよティナ、リゼット！　そんなエッチなとこ見せられたら、ボク！」
妹たちのアナル欲求と痴態の誘惑に勝てず、大急ぎで少年は早脱ぎ。靴もズボンも放り投げて、裸になることに何の抵抗もなく、パンツを降ろす。
今すぐ犯したい。どちらでも、むしろふたりとも。
（出したい……ぴゅって出したくて、ボクもう出したくって！）
雁太を丸剥きにした完全勃起が反りあがり、根元に重たい睾丸をぶらさげる。褐色の肉柱表面には血管が浮かび、どくどくと脈を打ち続けていた。肺の膨縮が速く、口を開いて

いなければとても呼吸にならない。
「んもう、お兄様。お子様にこぉんなコーフンしちゃってたの？」
右脇からひょいっと、膝立ちのティリスが潜り込んできた。
「うわっティリス？」
あとずさった際に踵の重心が乱れ、背後に用意された椅子に腰掛ける。
反対側からもリズエルが、少年の左腕をくぐり、雄渾な勃起ぶりを観察した。
「大きすぎますよね？　……兄さんの、チ……チンポ」
彼女たちの相貌もすっかり上気し、いきり勃つ肉棒にうっとりと見惚れて。男根の輪郭を正確無比となぞり、咽をごくんと鳴らす。
「ボクの、ぇと……ボ、ボクのがどうかしたの？」
今までは見られるのが恥ずかしかったのに、生理現象を異性に見てもらうのが心地よくて、腰ごと差し出す。ふたりの美女は問いかけに照れ、リズエルから呟いた。
魔導士のマントを外して楽になり、黒ビスチェを緩める。
「え、ぇえ。これは食欲……でしょうか。その、兄さんの味が忘れられなくて……」
「すぐ女の子に言わせたがるんだから。ほんともう……お兄様の、エッチ」
ティリスもマントを脱ぎ捨て、赤ビスチェの両脇に親指を差し込む。
どちらからも、ふくよかな巨乳がたぷんと零れ落ちた。向かって右のティリスから不満を口にし、椅子に跨がる男の子の眼前に、自慢の胸で接近する。

「お兄様ってば、こっちでもセックスエッチは他の女の子とだけだし。さっきはティナとリゼットのフェラチオで、すごく気持ちよさそうなんだもの……」
長身のリズエルも膝立ちの太腿で伸びをして、少年の目の高さまで乳弾を運ぶ。
ちょうど自分が風船を最大に膨らませているみたいに、視界を阻まれた。
「私たち、無視されてるみたいで心外です。……どうですか？　兄さん。やっぱり兄さんは大きなオッパイがお好みでしょう？」
量感たっぷりの乳果実はひとつだけでも、少女組のお尻一個分に相当する大きさ。それが視覚の枠内によっつも飛び込み、埋め尽くす。わずか十数センチの距離では、芳ばしい牝のにおいが強く、簡単に酔い狂わされそうだ。
（何度見ても、おっきすぎるよ……ティリスもリズエルも）
白肌は茹で卵のように艶々として、少量の汗を含んだ光沢が美しい。単なる肥大な脂肪にはありえない、引き締まった曲線が斜めに揺れ、乳芽をばらばらに振り下ろす。
桜色の弱点を自ら指で扱くティリスが、双乳の谷間を最大まで拡げた。
「あたしもリズエルと同じバストだもの。パイズリだってできるわ」
恥ずかしそうにリズエルは、巨乳をむんずと持ち上げ、双角を美唇に揃えて。両方とも一度に深めに頬張ってしまえる、爆乳ならではの離れ技を披露してくれる。
「んもぉぐ……ッぷはぁ！　こ、こんなコトだって、あん、できるんですよ？」
唾液の玉が頬に零れ、艶笑を淫靡に締め括った。誘惑美女からブロンドのポニーテール

をかきあげて、首筋に風を通し、肉感乙女も白銀色のツインテールを背中へと流す。
「いくわよ？　お兄様。あたしでたっくさん感じて？」
「私で感じてくださいね。お邪魔します……」
蕾をぴんっと勃たせる乳果が四方向から突進してきた。どちらも少年の裸体を、胸から下へと転がり、急所まで直行する。
「わわっふたりとも⁉」
そして一本の雄々しい肉棒をむにむにと包み込む。赤腫れた亀頭はみるみる柔乳の波に埋まり、わずかに鈴口しか見えなくなった。右のティリスは上から押しつけるように、左のリズエルは逆に押し上げるように、豊乳を圧迫し、肉柱の逃げ場を狭めてしまう。
「っあぁん！　はあ、どう？　お兄様。気持ちいいでしょ？」
感度を増したうえに道中はずっと焦らされ続けていた肉棒への、柔らかな刺激。待ち侘びた快楽の痺れがペニスを優しく降りてくる。
「そ、それは……もっもう！」
肯定で頷くつもりが、反射的に仰向き、身体じゅうを熱くした。苛烈な乳圧に剥き出しの性感帯を締めつけられ、熱量が急速に膨張していく。
（オッパイ気持ちよすぎて、ボク……！）
与えられる快感に少年は安堵し、両肩の力を抜いた。脚を開いてさえいれば、年上の美女がふたり掛かりで懸命に下の世話をしてくれる、至福の一時。

「手加減なんてしないんだから。お兄様、はあ、すぐにイかせて、あ・げ・る」
豊乳を搾りつつ上目遣いに反応を窺うティリスは、強気に甘く囁いて。
「イク時は、んあ、ど、どうぞ？　はぁ、兄さんの好きなだけ……」
繊細な羞恥とは裏腹にリズエルの手も、たわわな巨乳を大胆に揉みしだく。
「はあ、はぁ……す、すごいよ？　ぱいずり」
自分のもっとも硬くて敏感な部分で、異性の柔らかさを最大限に味わえる、パイズリをしかも、ふたりの美女に挟まれて。密着をせめぎあう肉釣り鐘の隙間から時折、埋もれた亀頭が息継ぎのごとくとば口を出し、先走り汁をぴゅっと飛ばす。
股間は大質量の乳弾に何度も踏みつけられ、椅子が軋んだ。少年本人の脚は、悦痺れを走らせ、爪先を変に曲げている。乳圧の激しい変動が集中する茎胴は、汗かく肉体の電源そのものに高熱化し、くすぐったい電流をばらまく。
ポニーテールの揺れる方向に首倒すティリスが、灼けた吐息をくぐもらせた。
「んはぁあ、あっ、やだ……また硬くなってる？　お兄様の」
外側に逸れた乳頭を、人差し指と中指で挟み、中央に寄せながら、てのひら全体で柔乳を按摩する。艶やかな唇からは、舌で粘性の涎を落とし、胸の谷間を滑りよくして。
「あはん、も、もう兄さん？　そんなに見詰められたら……私、嬉しくて」
奉仕だけは一途に尽くしてくれるリズエルも、くちゅくちゅと反芻した口蜜を少量ずつ舌で運び、乳谷を適度に潤滑させる。てのひらで麓を押し揉むのが慣れて上手い。

「っはあ！　はぁ、ティリス、リ……リズエル！　ボ、ボクなんだか？」
ふたりとも瞳に少年の、肉根が巨乳に包まれて悶える姿を映し、妖艶に頬笑む。青柳（あおやぎ）の眉は八の字に傾いて、睫毛を水平に揃え、唇は熱い喘ぎを吐き出した。
グローブならではの握りやすさと、しなやかな手首のグリップを利かせ、肘で描いた円の軌道そのままに乳圧を流動させる。
「まだまだよ、お兄様。イクのは、はあっ、これからだもの」
「遠慮ならさず、好きにお出しくださいね？　なんでしたら……私の、カオにでも」
股間一帯の空気が温もり、汗濡れの裸体を這い上がってくる。巨乳美女がわざわざ姿勢を低くして、勃起を慰めてくれる絵図に、性的興奮を禁じえない。
乳谷の波をくぐり抜けた怒張は、茸状の傘で口蜜をかき混ぜ、また沈没した。
（さいこーだよ……ぱ、ぱいずりって）
甘い痺れが股関節を突き抜け、脚の踵も爪先も浮かせる。床に足を着こうとしても、大腿筋が引き攣り、一定の高度から降りられない。
カウパー腺液が尿道を通過し、張り詰めた亀頭の感度を高める。
「お……お兄ちゃん、ティナも……はやくぅ、もうガマンしてらんないよお」
美女の乳遊びばかり眺めていた視界に、棒状の何かが差しかかった。左右対称の角度でもう一本も伸びてくる。
「兄くん、わたしも……前のれーぷみたいに、はあ、ごりごりって……」

ベッドの上で羞恥の開脚ポーズから自力で起き上がれない、アナル少女たちは、尻穴のロッドを魔力で一メートル近くも長くしていた。マナは枯渇したはずだが、何かまたコツでも掴んだのか、少年の手の届く範囲で尻尾を振り、切なく求める。

「しっ、仕方ないなぁ？　はぁ、お、お仕置きなのに感じちゃって。……っはぁ！」

どちらのロッドも迷わず逆手に取って、息んで引っ張る。

妹たちの小柄な細身はベッドに、それぞれ赤と黒のユニフォームを引きずって、しとど濡れた股座を近くににおわせた。

「やっやだ、お兄ちゃん、おぉオシリ！　あんっ、オシリの捲れへる！」

「ひはぁあああ？　あ……ああ！　いいの兄くん、かきまわして！」

肛門の窄まりが盛り上がり、黄濁の蜜を滲ませる。お漏らし以降、少女物のショーツは乾く暇なく蒸れて、幼い秘裂に薄生地をぴっちゃりと吸着させる。手首を返せば、小穴がひしゃげるくらいに抉れ、ティナもリゼットも汗だくのお尻を一緒に振り上げた。

「あはあんッ！　おっお兄ちゃん、そこ！　そこなの！」

「今の！　兄くん、いっ、今の……おっおく、もっとおくう！」

ふたりともトレードマークのおさげを波打たせ、シーツを半分ずつかき集める。ティナは平たい胸をベッドに這わせて、リゼットは逆に背をのけぞらせ、肛門開発に色っぽく身悶えた。注文通りにロッドを捻り込めば、年上の姉に似た春声を散らす。

「ききっきてる！　また入っれきへるぅ！」

「兄くんっ、まだおく……あっあぁ？　オシリ……おっオシリに！」
あどけない小顔同士が、後少しでキスも可能な距離まで近づいて、汗雫の止まらない頬を赤らめ、湿った吐息を交換する。
（ほんとに感じちゃってるよ、オシリの穴で！　はあ、オマ〇コみたいに！）
その喘ぎの隙間を狙って杭打ち、舌を押し出させるのが面白い。嗜虐を知った少年は夢中に、アナル少女たちの新しい出入り口を開拓し、可愛い牝の腰遣いを競わせた。
肉体の反応に正直に悶えさせるのも、逆に悶えさせられるのも心地よい。
「お兄様？　んふあ、今はあたしとパイズリでしょ？」
悔しそうにティリスが体重を掛け、巨乳で少年の股間右半分を押さえつける。向かいのリズエルも対抗心を燃やし、さらに前のめりに。多量の唾液が染み渡った胸の谷間が、牝の香りを立ち昇らせ、淫らな酔いをもたらす。
「思い出してください、兄さんは、はあ、私のオッパイが初体験でしょう？」
つき立ての餅のごとく弾力に富んだ乳弾が、ぶつかり、反発した。
ぬちゃぬちゃ！　ぬちゅ！　ぬちゅぬちゅぬちゅ！
「っあ？　ぁあ、んくあ！　いっいいよ、ぱっぱいずり！　ぱいずりも！」
血液の循環する肉柱を扱き抜かれ、真っ赤に腫れあがった亀頭がひりつく。肉穴と大差ない猥音が、摩擦を耳にも実感させ、柔らかい乳肉の狭間で、男根特有のやじり型が鮮明になってくる。両脚を駆け巡った痺れは股関節で再びひとつになり、脊髄を抜けた。

のたうつ肉棒が柔乳の谷間を泳いで、漏尿じみたカウパー腺液を溢れさせる。
「もっもう出る！　出すよ？　ふたりとも、ティナもリゼットも！」
急な発作が始まり、心臓が胸の内側を殴りつける。衝動に駆られて少年は、早口に性欲の捌け口の名を呼び、両手のロッドを螺旋状に捻り込んだ。魔法少女たちの窮屈な尻穴を穿り、押した分だけ引き抜いて、セピア色の粘膜を裏返す。
ティナとリゼットはグローブを外すこともせず、ちゅぱちゅぱと幼稚に指しゃぶり。
「あむちゅ、んぐ、うっ……はあっお兄ちゃん、もっろ、もっとオシリひて！」
「そこらのっ、そこ！　おっ、おお、オシリでイク……イクっんぐ！　んもぉぐ！」
誰にも秘密の肛門を、お兄ちゃんの好き放題にされながら、瞳をぼうっとさせ、虚空に視線を彷徨わせる。親指の付け根に短い舌を巻きつかせる。
特大の巨乳を揉みあわせるふたりの美女も、肘から手首の反復運動を加速させた。
「お兄様はっ、あぁん！　あたし！　あたしでパイズリなの！」
「私です！　はあっ兄さん、くふう、ど、どうですか？」
肉果実がひしゃげ、乳圧をうねらせる。逞しいペニスでも直進が難しく、血液が行き詰まって煩悶させられる。熱い痺れも肉柱を登りきれず、幹胴で暴れてばかりだ。爆発寸前の法悦が根元で俄に膨らむ。
「これもうイク！　ぱいずりいいっ、ぱいずり！」
次に少年が見下ろした時、乳弾はそれぞれ、箱詰めされるように別の三個と密着し、肉

棒を根元から締め上げた。
ずちゃっぬちゃ！　ぐちゃぬちゅぐちゃっ！
「あぁイク！　いっイク、イクよ？　はあっ！　はあはあはあはあはあ！」
息を乱して、吸い込まれるようなパイズリに悶えまくり、汗をだらだら流す。剛直で始まる発熱が、肉体に張り巡らされた感覚神経を燃やし、頭の中まで火あぶりにする。
「お兄様、イって！　あたしのカオにびゅってして！」
「どうぞ！　兄さんのチンポ汁なら、っはあ、大歓迎ですから！」
よっつの肉釣り鐘がわずかに離れた直後、肉砲が血流量を増大させた。熱痺がとば口の付近に殺到し、棒一本で繋がった腰も打ち震わせる。
「はあはあはあ――出るっ！　れるっ、出るでる、れちゃうよぉおおおおおおッ！」
声のトーンをあげずにはいられない、甘すぎる快感が熱く放たれていった。
どびゅどびゅっ！　どびゅ！　びゅくびゅくっ、びゅるびゅるびゅる！
ペニスだけでなく、全身で撃ち出すような拍動感だ。連鎖する快悦が波紋を重ね、頭を真っ白に染めていく。少年は舌も涎も垂らして、エクスタシーに酔いしれた。
（や……やめらんないよ、こっ、こんなの！）
しかも煮えたばかりの白濁汁を、美女ふたりに、好き放題に浴びせてしまえる支配感もたまらない。欲望の液が前髪から滴って、眉間とこめかみに分かれ、鼻筋と頬をほぼ均等に舐め降ろす。美貌汚されるティリスも、リズエルも、さも嬉しそうにはにかんだ。

「やぁん、お兄様ったら、はあ、まだたくさん……！」
「すごいです、兄さん……んぷはぁ！　どうぞ、ぶっかけて！」
濃厚な牡汁をてのひらに集め、肉果実に塗り広げていく。その間も、深い谷間に一度は沈んだ怒張が、再び勢いよく飛び出し、四方八方に子種を撒き散らす。
淫猥な心地よさに耽溺し、無意識に少年はロッドを強く握り締めた。柄尻が魔法少女の直腸深くを穿ち、尾てい骨の辺りに激突する。
ティナもリゼットも、唇から親指と涎の糸を抜き取り、甲高くいなないた。
「あぁああっお兄ちゃん！　おおっお、お兄ちゃぁぁああぁぁぁああああああああ！」
「兄くんイク！　イクのっオシリ！　オシリィクぅうううぅうううううううう！」
ロッドを呑み込む肛門が、ぎゅうっと窄まり、小さな飛沫の音を立てる。
ぷしゃああああああああ！
容姿可憐なコスチュームから、悶え汗でべとべとのミニサイズのお尻を突き出し、病的な痙攣を起こす。細身は浜に打ち上げられた魚のごとくもがいて、極太の尻尾を少年の手から奪い返し、危なっかしく振りまわした。
あられもない開脚ポーズが明らかに引き攣り、秘裂に食い込む尿漏れのショーツを、じわりと濡らす。魔力の供給を絶たれたらしいロッドは短くなって、肛門の栓に。ティナとリゼットの小さな胸は、ともにベッドに落下した。
「……っんはあ！　はあっ、はあ……す、すごい……気持ちよすぎて」

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/